環東シナ海における海域交流としての僧侶の役割

所属：東北大学国際文化研究専攻　博士前期課程二年（助成時）
盧　暁鳳

１.研究背景と目的

日本と中国、そして朝鮮（韓国）は、何れも東シナ海に面し、古くからこの海域を経由して様々な交流が行われてきた。そして海域を媒介とした人やモノの交流は、国境を越えて各地に様々な文化的土壌を生み出し、広く文化の種を育てることとなった。しかし、中国・日本をはじめとする各地域の研究は、依然として旧来の一国史観型の枠組みからの検討にとどまっているのが現状である。そのため、各地域の文化の起源やその発達過程を探究する際には、従来見過ごされていた東アジア地域に通底する海域交流によって育まれた文化という視点から、海を渡った僧侶をとらえ直す必要があると考えている。

そのため、本研究は、環東シナ海における海域文化としての「僧侶」について研究し、特に宋代における日本人僧侶の中国見聞記や日記・記録を介して当時の日中を繋ぐ人的交流における僧侶の役割を考察している。海域交流の学説が東アジアでも成立することを実証し、様々な地域の社会認識の解明と、中国史学界で注目され始めている、海域交流理論の東アジアに於ける援用を最終の目的としている。

２.要約

本研究は、日宋僧・成尋(じょうじん)の日記の『参記』を中心資料に設定し、『参記』に記された成尋と宋の僧侶、朝廷の官員、商人との交流の実態と、その交流がいかに双方に影響を与えたかを論じた。成尋は個人として活動したにもかかわらず、宋人との交流により、日宋仏教文化交流の促進、宋代における日中関係の発展などの面においても大きな影響を残している。しかし、現在まで日宋交流に関する研究をみると、特に交易の研究――つまりモノの交流の研究や交易を行う商人の研究に集中している傾向が見受けられるものの、「文化運搬者」としての僧侶たちが日宋交流に担った役が意外に軽視されている傾向が見受けられる。そのため本研究は看過できぬ日宋交流における僧侶の役割に目を配り、平安中期に当時の中国（宋朝）へ渡航した日本人僧侶の日記『参記』を研究材料として、成尋と一人一人の宋人との交流の具体像の把握によって、①外来訪問者と現住者の間の人的接触が及ぼす文化的意義と、②日宋という国家間の交流における宗教活動の役割の一側面を究明した。

３.研究実施項目と内容

（１）先行研究の収集と基礎的考察

成尋及び『参記』に関する先行研究を整理し、成尋の主な事績や、家系、法系などについて明らかにする。そして、『参記』の他に、成尋の母である成尋阿闍梨母の『成尋阿闍梨母集（じょうじんあじゃり ははのしゅう)』の記事も材料とし、先行入唐入宋僧からの影響などの面から、成尋が渡宋を志した動機とその由来を究明した後、成尋が渡宋を実行に移そうと決心した原因などについても検討する。また、物資、情報収集などの面から成尋の渡宋準備について考察し、『参記』執筆の目的を軸とし、その時代における成尋の位置付け、入宋携行した荷物、入宋後具体的な活動などを着目しながら、成尋入宋の使命の明瞭化を図りたい。

（２）『参記』の内容の整理と分析

『参記』の中に記録された文書、筆談、書簡、詩作に着目し、その中に現住者との接触交流の事例を抽出し、宋の官員、商人、僧侶と類別し、それぞれの人的接触の内容、双方が接触した背景、その後の経過、接触の方式などを網羅的整理する。成尋と宋人との接触の様相を明らかにする上で、成尋と宋人と関係を築いた内面的な原因などについても検討する。

（３）日中両国の史料を比較・検証する調査

多角的に日中両国の史料を比較・検証する研究方法を採用する。中国側の官制史料である『宋會要輯稿』、『宋史』、『文獻通考』など政府が編纂する史書あるいは史家の作品と日本側の『続本朝代往生伝』、『本朝高僧伝』などの僧伝を証明考証する史料として、入念な対照作業を実施し、宋人に見る成尋の活動したことや、宋における影響、それに、成尋が入宋する前の中国認識などを見出して解明する。

（４）実地調査：

①成尋が阿闍梨を勤めた天台證門宗総本山 岩倉観音 大雲寺（京都市左京区岩倉上蔵町305 番地)、②成尋が密航を図った呼子（佐賀県唐津市呼子町呼子）の現地調査をする。